

『見えない人間』と『ジョバンニの部屋』の類型と類型外
両作品に見られる無意識という夢と意識

はじめに

黒人の文化、芸術の重要性を声高に宣言したのは、1920年代のハーレム・ルネッサンスあたりが最初と言えるであろう。そして第二次世界大戦中のユダヤ人迫害への関心から派生して、1950年代のバスボイコット運動に端を発する公民権獲得運動が実行されていくのである。ラルフ・エリソン (Ralph Ellison, 1914-94) の『見えない人間』 (*Invisible Man*, 1952)¹、そしてジェイムズ・ボールドウィン (James Baldwin, 1924-87) の『ジョバンニの部屋』 (*Giovanni's Room*, 1956)² が書かれたのもこの時期である。両作家ともに先輩格であるリチャード・ライト (Richard Wright, 1908-60) による人種的優劣意識を産み出した社会への非難を示した『アメリカの息子』 (*Native Son*, 1940) に影響を受けているのはよく知られていることである。両者が人種問題を意識したのは明白である。

デニス・ウェルチ (Denis Welch) は『見えない人間』の主人公を墓から復活するキリストになぞらえて運命とアイデンティティを追求していく存在と定義しており、「これらの可能性の一つは多様性の中の統一性というアメリカの民主主義の理想を実現させる事である」 (“one of these possibilities is to achieve the American democratic ideal of unity-in-diversity”) (377) と説明している。多様性と統一性というのは、様々な人種の混合性を表わしており、民主主義と人種問題を同一線上に語るのは自然な事と考えられる。

そして一見すると黒人と白人の恋愛の世界を描き、しかもホモセクシャルの世界を扱っている『ジョバンニの部屋』は人種問題とは違ったテーマに思えるかもしれない。しかし、人種問題の観点から述べている批評家も実際にはいるのである。ジョセップ・M・アーマンゴル (Josep M. Armengol) は「ボールドウィンの中で人種とセクシャリティは単純に関連しているだけでなく、実際に交換可能である。その結果、ホモセクシャリティは文字通りにも比喩的にも、後でわかるように、異性愛が完全に白人性と関連しているのと同様に、

黒人性を連想させるのだ」(“ race and sexuality in Baldwin are not simply interrelated but virtually interchangeable so that homosexuality becomes, literally and metaphorically, associated with blackness at the same time that heterosexuality is, as we shall see, indissolubly linked to whiteness ”)(674)としている。そしてジュールジャン・E・グランド(Jürgen E. Grandt)は「ボルドウインの小説が黒人の作品なのか白人の作品なのかは、作品がはっきりと述べていない問題であり」(“ whether Baldwin’s novel is a black text or a white text becomes the very question the text refuses to answer ”)(286)「この小説が声高に宣言しているのは全ての作品は異種族混交であり、純血で生のままで、文化的に本物の作品などは存在していない、という事なのだ」(“ what the novel loudly proclaims, namely that all texts are miscegenated, no text is pure, undiluted, culturally authentic ”)(286)と説明している。やはりグランドも人種的問題と絡めてこの作品を評しているのである。

これらの通り両作品のベースにあるのは人種問題である。そしてこの人種問題を扱う材料として『見えない人間』と『ジョバンニの部屋』は意識する事の重要性を読者に印象づける主人公を用意したのである。『見えない人間』の主人公は「僕は生涯何かを探し求めてきた」(“ All my life I had been looking for something ”)(15)であり、「自分とは自己以外の何者でもない」(“ I am nobody but myself ”)(15)という悟りを見つけるために考え行動するのである。悟りとは意識である。そして『ジョバンニの部屋』のデイビッド(David)は明白な悟りを自覚する主人公として描かれていないが、前半部分で自己のホモセクシャリティに対して無意識から意識へと変化させる場面がある。幼い時のジョーイという少年との遊びの中で「僕の手が彼に触った時、彼と僕の中で何かが動き、二人がこれまで知っていた感触のどれとも違う触れあいを感じた」(“ when I touched him something happened in him and in me which made this touch different from any touch either of us had ever known ”)(13)

「そして自分の心臓が激しく動悸を打ち、ジョーイが私に寄りかかって震えているのを自覚した」(“ And I realized that my heart was beating in an awful way and Joey was trembling against me ”)(13)。接触という偶然、無意識から自己の性、少年のジョーイという男性に対しての意識の芽生えが明らかではないだろうか。無意識から意識への変化なのである。

意識と反対のものは当然無意識であるが、その代表的なものとして夢が挙げられるだろう。『見えない人間』と『ジョバンニの部屋』では意識に対しての無意識の夢が作品中で重要な働きをしている。無意識としての夢の働きとそれぞれの主人公の意識する事による自己認識の結果をここでは述べ、両者の違いを論じつつ、両作品のベースにある人種差別問題の共通コンセプトを考えてみたいと思う。

1. 『見えない人間』における外界の解釈と自己認識

光や視力というモチーフは作品中で何度も繰り返される表現であり、作品タイトルとも大いに関係がある事である。探し続ける主人公が光明や未知から既知へと変化させる事を考えるなら、繰り返し表現され、重要性を読者に印象づけようとするのは、当然のことなのかもしれない。プロローグで主人公は「光がないと僕は姿が見えないだけでなく、形がないものになってしまう。そして自分の形を認識できないことは、生きながら死ぬようなものだ」(“ Without light I am not only invisible, but formless as well; and to be unaware of one's form is to live a death ”)(7)と自己の存在や光に代表される新たな認識への願望を明らかにしている。光と新たな認識、知覚との類似性は彼の「真理は光であり、光は真理である」(“ The truth is the light and light is the truth ”)(7)という表現にも明らかではないだろうか³。主人公は自分にとっての真実を探し続ける人間なのである。

祖父の白人に対して一生戦い続ける、そして祖父の白人への温

順さは裏切者の名にふさわしい、という言葉が頭に残り、生活が順調な時でも自分が罪を犯しているようで心が穏やかではなかったと主人公は告白しているが(17)、彼は自分の求めているものに対して自分自身を向かわせているのである。高校の卒業式での演説の大成功を受けて、自分の求める成功をさらに大きくするために、演説とは全く関係ないとも言えるボクシングの余興で、再度同じ演説をする事になったのも、彼の考える真実、つまり白人に気に入られ自分が優位に立つという事を求めた結果なのである。祖父の裏切りという言葉に気がしつつも「自分は町のよりぬきの純潔の白人たちから褒められていた」(“ I was praised by the most lily-white men of the town ”)(16)事をうれしく思っているのである。ボクシングの余興でも成功を収め、大学への給費生資格書を手にした主人公は、意識と願望、そして結果が同じ方向を向いていると言っていいたいだろう。

しかしながら結果的に大学へ進学した後、有力者に大学での将来を奪われる主人公は、このような祖父との夢をボクシングの後に見ている。意識に対しての無意識の描写として興味深いのではないだろうか。

Then later he told me to open my brief case and read what was inside and I did, finding an official envelope stamped with the state seal; and inside the envelope I found another and another, endlessly, and I thought I would fall of weariness. “ Them’s years, ” he said. “ Now open that one. ” And I did and in it I found an engraved document containing a short message in letters of gold. “ Read it, ” my grand father said. “ out loud! ”

“ To whom It May Concern, ” I intoned. “ Keep This Nigger-Boy Running. ”(33)

後になってお前の書類鞆を開けて中に入っているものを読めと

言うので、鞆を開けると中に州の印がついた公用の封筒があった。その封筒の中にはまた別の封筒があって、またその中にはまた封筒があるというふうで、いつまで開けてもきりがないので、僕はこれでは疲れて倒れてしまいそうだと思った。祖父は「いつまで時間をかけているんだ、ほら、それを開ける」と言った。開けてみると、中に金文字で短い文句の書いてある木版刷りの文書があった。「それを読め、大きな声でな」

僕は調子をつけて読んだ。「関係者各位。この黒人少年を走り続けさせよ」

この夢が正夢となり、大学を追われ無関係になりながらも、大学から有力者へ紹介してもらっていると信じ込まされてしまう主人公である。まさに信じながら走り続けさせられる、そして大学と関係するという到達不可能なゴールに向かって走り続けさせられる主人公である。現実につながる夢であり、彼の将来を告白したものなのである。この夢が現実になってしまったのは、大学の有力者の力によるものであり、彼自身の力によって夢を現実のものへと変化させたのではないのである。大学入学後、黒人の貧困地区へ白人有力者を車で案内したのは、その有力者の希望であったし、その結果大学からの放校という処分を受けたのも、白人有力者の支配下にある大学の学長の差し金によるものなのである。この外界とは権力と同一である。夢の本質は他者の権力による外界なのである。

それでは主人公は正夢となる夢の不利益をそのまま受け入れるだけで結末を迎えるのだろうか。そこには外界の権力を自分の中で解釈して新たな指針を見出すという意味はみられないのだろうか。「自分が見えない事の有利さ」(“the advantages of being invisibility”)(5)という悟りを持つ以前の主人公の認識は偏りがあり、そして狭いものである。先のボクシングの試合は白人を楽しませるための余興であり、実際に行われた事も目隠しによる複数人数のボクシングであったり、賞金をばらまく際に電流を流したりと汚

い見世物といった類のものであった。しかし、主人公はこの試合に出る事を彼個人を超えた「我々黒人のコミュニティ全体の勝利であった」(“ It was a triumph for our whole community ”)(17)と感じていたのである。単に個人として参加した汚い余興が黒人全体の勝利と考えられるわけではなく、彼の認識の狭さ、間違いは明らかではないだろうか⁴。そしてボクシングの後でする事になっていた自分の演説についても「僕は自分自身をブッカー・T・ワシントンの可能性を秘めていると考えていた」(“ I visualized myself as a potential Booker T. Washington ”)(18)と説明しており、自分自身と置かれた環境への認識の間違いを同様に説明できるのである。この演説は白人の汚い余興の一環に過ぎないのである。黒人全体の勝利と考える場合も偉大な先人に自分をなぞらえる場合でも、自分自身による自分自身の意味づけという考えは希薄であり、他者への意味づけを通して行っているのである。

挫折を経て悟りを開く主人公には「僕は見えないかもしれないが、盲目ではない」(“ I'm invisible, not blind ”)(576)と考えており「自分は見えないのだから絞首にされても見えるようにはならない」(“ I was invisible, and hanging would not bring me to visibility ”)(559)という消極的思考や「他者の不合理さのために死ぬよりも、自分自身の不合理さを生きる方がよい」(“ it was better to live out one's own absurdity than to die for that of others ”)(559)という積極的思考まで、矛盾はあるかもしれないが、自己への考察を深めているのである。消極性と積極性の間を逡巡しながら自己を模索しているのである。悟りを開く前に、他者に意味づけを求めている姿勢とは明らかな違いがあるのがわかるであろう。

シャンナ・グリーン・ベンジャミン(Shanna Greene Benjamin)は「見えない人間の内部の心理的再生は、自己発見の探求に基礎を与え、そして自分を導いていく自分自身と歴史の記憶を必要としている」(“ Invisible Man's internal, psychological rebirth requires him to reclaim the memories of self and history that will ground and

guide him in his quest for self-discovery ”)(141)と述べているが、自分自身の記憶とは経験した挫折であり、歴史の記憶とは彼の祖父の話に代表される黒人の戦いの歴史である。それらを自分自身の中で融合させて、自己発見を成し遂げているのである。これを踏まえて作品の最後の主人公の認識を引用してみることにする。

Being invisible and without substance, a disembodied voice, as it were, what else could I do? What else but try to tell you what was really happening when your eyes were looking through? And it is this which frightens me:

Who knows but that, on the lower frequencies, I speak for you?
(581)

見えない人間で実体がなく、いわば肉体を離れた声である僕は、他にどうしようというのか。諸君の目が僕の身体を素通りしているのでは、実際に何が起きているのかを語ろうとしてみる以外に方法がないではないか。そして僕を怯えさせているのは、次の点なのだ。

僕は低周波数で諸君の代弁をしているのかもしれないのではないか。

自分で起きている事を語るという自分自身による行動、そして他者の代弁である事を恐れる、自分自身ではなくなる事への不安を読み解くことが出来る。ここで、はっきりと自己という認識を見出しているのである。そしてその発見した自己というのは、決して逃げではなく、「僕は冬眠期間を寝過ぎした」(“ I’ve overstayed my hibernation ”)(581)のであり、「僕は古い皮膚を振り落として穴の中に置いていく。古い皮膚なしでも見えない人間に変わりはないが、それでも出て行くつもりだ。出て行くんだ」(“ I’m shaking off the old skin and I’ll leave it here in the hole. I’m coming out, no less

invisible without it, but coming out nevertheless ”)(581)という積極的姿勢なのである。光明を見出していると言えるであろう。

外界の権力が本質である主人公の夢は正夢になるが、彼は外界からの影響を不利の中においても解釈し、自己への問い、そして自己を変化させる事によって、光明を見出しているのである。夢の無意識は意識によって主人公の将来を向上させる予感を感じさせながら変化しているのである。外界を解釈、消化、そして意識を変化させた主人公は光明を見出し、夢で見た不利益をプラス方向へ変化させた主人公であると言えるであろう。夢の無意識のマイナスは、意識によりプラスへと変化したのである⁵。

2 . デイビッドの夢と自己認識の曖昧さ

『ジョバンニの部屋』の主人公デイビッドは自らの性的志向に苦しみ、女性のフィアンセ、ヘラ(Hella)と男性の恋人ジョバンニ(Giovanni)との間の板挟みの窮地を経験する登場人物である。作品の冒頭で南フランスの屋敷で窓に向かって立っているデイビッドは、自分自身が映る窓に向かってこのような感想を述べている。「私は矢のように細長く高い背丈。光り輝くブロンドの毛髪。どこと違って変わったところはない顔立ち」(“ My reflection is tall, perhaps rather like an arrow, my blond hair gleams. My face is like a face you have seen many times ”)(9)。鏡の働きをしているこの窓は、デイビッド自身の内省を表わす描写でもあるのである。白人でブロンドの髪、そして人がよく見かけるであろう顔立ちは、まさに典型的なアメリカ人 WASP、アングロサクソン系白人プロテスタントを連想させるのである。ゲイの志向を持つデイビッドは、窓の鏡に映る自分の姿と異なり、内面と外面の乖離、矛盾をはらんだ人物である。WASP の類型では異性愛が通常のもので考えられてきたのは言うまでもないことである⁶。

矛盾の存在としてのデイビッドは彼の無意識の領域、夢の中でも

板挟みの窮地を経験している様子が描かれている。既に死んでいる母は何度も夢の中に現われると説明があるが、ここではそれを端的に表わした一節を引用してみたいと思う。

I scarcely remember her at all, yet she figured in my nightmares, blind with worms, her hair as dry as metal and brittle as a twig, straining to press me against her body; that body so putrescent, so sickening soft, that it opened, as I clawed and cried, into a breach so enormous as to swallow me alive.[. . .] (16)

私はほとんど母の記憶を持っていないが、それでも母はよく私の悪夢の中に現われた。うじ虫が巣くっている目の穴の上に枯れた小枝のようにもろい髪の毛をのせた母が、必死になって私を自分の体におしつけようとした。母の体は腐っていて、ぶよぶよに柔らかく、ぽっくり大きく左右に裂けて、あらがい叫ぶ私を生きながら飲み込もうとするのだった。

包み込むイメージの母性愛はデイビッドにとって恐ろしい化け物のイメージとして何度も夢の中に登場するのである。ゲイの志向を持つデイビッドが意識する女性のイメージと考えられるのではないだろうか。フロイトやユングが述べている通り、男性の抱く女性のイメージに自分の母親が重要な働きをするのは、よく知られている事である。悪夢の中の母のイメージをデイビッドの考える女性のイメージと考えるのは、見当違いな事ではないのである。女性のフィアンセ、ヘラの名前が(“ hell ”)、「地獄」を連想させるのもこのことを証明している。

性的マイノリティのLGBT(レズビアン、ゲイ、バイセクシャル、トランスジェンダー)の人権が認められてきたのはまだ最近の事であるが、デイビッドの状態はゲイのカテゴリーの中でも矛盾を示す

ものであることが、社会学的なアプローチからも証明する事が出来る。エド・ハーマンス (Ed Hermance) は「多くのゲイの男性は自分たちが10代であった頃、大人たちと良い関係であった」(“ Many gay men have told me that they had had positive relations with adults when they were teens ”)(102)とゲイの人たちへのインタビューの結果を説明しているが、デイビッドは10代の頃決して周囲の大人と良い関係であるとは言えない。男性である自分の父親に対しては「私たちの間の男同士の率直さとして通っている事に私は酷く疲れ怯えていた」(“ What passed between as masculine candor exhausted and appalled me ”)(21)と語っているし、父の姉エレン (Ellen) に対してある時期から「エレンを憎む」(“ I hated Ellen ”)(20)ようになり、酔って帰るデイビッドを「エレンが待って起きているようになり、エレンと私とでくる夜くる夜も口論するようになった」(“ it was I who found Ellen waiting up for me, Ellen and I who wrangled night in and night out ”)(21)と告白している。ハーマンスの説明するゲイたちが語る10代の頃の周囲の人たちの築いた良い関係ですら、デイビッドは築けていないのである。ゲイとしても矛盾を含んだ存在と言えるのではないだろうか。

マイナスの夢の根本は『見えない人間』の外界の力によるものとは違い、デイビッドの場合自分自身の精神という内面にある。そして夢の存在の内的起因性は、デイビッドの実際の行動にも影響を与えている。フィアンセのヘラとの結婚も上手くいかず、恋人ジョバンニとの生活も破綻してしまうのである。夢が主人公の実際の生活に影響を与えるという点では『見えない人間』の主人公と同じである。しかし、デイビッドの夢の存在理由は自己に由来するという点で『見えない人間』の主人公とは異なっているのである。

『見えない人間』の主人公は、夢の不利益を辛い経験をしながらも、自己認識によって解釈し、結末である種の光明を見出した。それでは『ジョバンニの部屋』の主人公デイビッドは、やはり自分で何らかの答えを見いだす事が出来たのだろうか。デイビッドは自分

の感情をいつわり慣習的な結婚、つまりジョバンニという男性を捨てて女性のヘラとの結婚によって事を解決しようとする。ヘラを自分を正当化するための道具として使うのである。内面の男性に対しての恋という苦しみを、外面の女性との結婚という慣習によって和らげようとするのである。しかし、それは自分自身に嘘をつくことであり、内面の葛藤を解決できるはずはない。結果的にヘラとの結婚を進めるにあたり、ジョバンニとの関係を清算しようとする時も穏やかな解決ではなく、喧嘩別れとなる激しい感情をさらけ出すのである。自分自身への嘘をつきながら、それを決して認めず、慣習に不本意ながら従う事を選ぶデイビッドが、理性を失うような態度をとるのも不思議ではないのではないだろうか。ジョバンニと別れようとする時のデイビッドの発言を引用してみることにする。

‘ Yes, ’ I said, wearily, ‘ I can have a life with her. ’ I stood up. I was shaking. ‘ What kind of life can we have in this room? this filthy little room. What kind of life can two men have together, anyway? All this love you talk about isn’t it just that you want to be made to feel strong? You want to go out and be the laborer and bring home the money and you want me to stay here and wash the dishes and cook the food and clean this miserable closet of a room and kiss you when you come in through that door and lie with you at night and be your little girl. [. . .] (134-5)

「 そうだよ 」と僕はうんざりして言った。「 彼女となら暮らせる 」僕は立ち上がった。体は震えていた。「 この部屋でどんな生活が出来るんだ。君の言うその愛、そいつはただ自分が強い気になりたい、という事じゃないか。君がしたいのは、毎日外へ出て労働をして金を持ち帰り、僕は一緒にいて皿を洗い食事を作り、この惨めな押し入れのような部屋を掃除して、君がドアから入

ってきたらキスをして夜は君と寝て、君のいい娘になる事だ」

体を震わせながら嘘である強い言葉を発しているデイビッドは、まさに感情失禁の状態である。この自己欺瞞では内面の苦しみは解決できるはずはないのである。サイライナ・ジョンソン・ルリエ (Cyraina Johnson-Roullier)は「デイビッドがジレンマからの救助を求めるのは外界においてであるが、唯一の可能な救助というのは彼自身の中で見つける事が出来るというのは、ここではっきりしている」(“ It is within the world outside that David sought release from his dilemma, but here it is made that the only release possible is to be found within himself ”)(950)と述べているように、内面の苦しみはやはり内面によってでしか解決出来ないのである。ヘラとの生活に真実があるのではなく、ジョバンニとの生活に真実があるのは当然の事なのである。デイビッドのやるべき事は、自己欺瞞ではなく、ジョバンニとの関係において将来の建設的な計画を立てる事だったのである。結果的にデイビッドは自分のフィアンセ、ヘラを失う。そしてデイビッドと別れた事で殺人を犯してしまうジョバンニとは、死刑になるという事で、ジョバンニをも失ってしまうのである。自己欺瞞の結果、残ったのは孤独という状態だけである。

ジョバンニの死刑執行の日を知らせる手紙を手にした後、デイビッドは作品冒頭で窓という鏡で自分自身について内省したように、今度は実際の鏡によって自分を分析する。鏡に映る自分を嫌い、「鏡を打ち割って自由になりたい」(“ I long to crackle that mirror and be free ”)(159)と思うデイビッドは解決出来ていない自分自身への感情を良く表現している。デイビッドにとって「墓場の旅はすでに始まっているのであり、腐敗への旅は常に、そしてすでに、半ば終わっている」(“ The journey to the grave is already begun, the journey to corruption is, always, already half over ”)(158)と自分を分析している。光明とは正反対の暗黒と失敗の結果は明らかではないだろうか。

『ジョバンニの部屋』におけるデイビッドの無意識の領域である夢の根本は、『見えない人間』の夢における外界の権力とは違い、自分の感情という自己発生的なものであった。デイビッドはこの自己発生的な夢に対して、自己認識を積極的に変化させる事なく、恋愛感情の内面を偽り、現実を有利な方へ変化させる事はなかった。夢の不利が意識によって変化して、光明に転じる事はなかったのである。自己認識の曖昧さと偽りによって、夢が変化することはなかったのである。『見えない人間』の主人公との差が明らかになってくるのではないだろうか。

結論

『見えない人間』も『ジョバンニの部屋』も黒人作家による作品であり、人種問題を強く意識した作品である事に異論の余地はないであろう。『見えない人間』の名前のない主人公が「私は冬眠を寝過ぎたようだ。なぜなら見えない人間でも社会的に責任のある役割を演じる可能性があるのだから」(“ I’ve overstayed my hibernation, since there’s a possibility that even an invisible man has a socially responsible role to play ”)(581)と行動を新たに起こそうとする意思で作品が終わっているのに対して『ジョバンニの部屋』の主人公デイビッドは恋人であったジョバンニの死刑執行の通知を破り捨てながらも、いつまでもそれが風に舞うのを見守っているという消極的な姿勢で作品は終わっている(159)。破った手紙が風でデイビッドにまた戻ってくるという描写は当然ながらデイビッドの未練を表わしていると考えられるのである。そして自分の責任で起こした行為を「私は信じなければならぬ。信じなければならぬ。神の厳粛な恩寵が自分をこの場所に連れてきたのだが、それが私をこの場から運び出す全てのものだということを」(“ I must believe, I must believe, that the heavy grace of God, which has brought me to this place, is all that can carry me out of it ”)(159)と神に責任を転嫁

しているのである。意思の力ではなく、神の力を持ち出している点、他力本願的態度は『見えない人間』の主人公の結末と対極に位置しているという事が明らかであろう。

アリヤ・I・アバー・ラマン (Aliyyah I. Abur-Rahman) は『ジョバンニの部屋』について「ボールドウィンの『ジョバンニの部屋』における想像力の力とは、主観の発展を固定した人種的立ち位置を社会的コンテクストの中で問うことである」(“ Baldwin’s imaginative endeavor in *Giovanni’s Room* is to interrogate subjective development in the social context of fixed racial positionalities ”)(480) と述べ人種の問題を改めて明らかにしている。そしてニック・ブロメル (Nick Bromell) は黒人アメリカ人全般について社会学の観点から「尊厳を持つという想定は、共同社会性が授与され確認されるための基礎である」(“ the presumption of having dignity is the basis on which citizenship is conferred and confirmed ”)(288) と述べている。『見えない人間』の主人公が結末で社会における責任を強く意識している事とブロメルの言う尊厳が重なってくるのではないだろうか。どちらも社会の中での立ち位置が重要であり、それゆえ人種の問題にも関わってくるのである⁷。

本稿の問いは作品中の無意識の夢が、両作品の中でどのように扱われ、主人公の意識と自己認識とどう関わっているかを明らかにする事、そしてその違いが両者の黒人文学の特徴にどう関係しているかを示す事であった。第1節で『見えない人間』の名のない主人公は、外界に根本のある夢の不利益を、意識の力、自己認識によって変化させ結末で光明を見出している事を明らかにした。夢の不利益はプラスに変化したのである。そして第2節の『ジョバンニの部屋』の主人公デイビッドは彼の見る悪夢という夢の不利益を、自己欺瞞、自己認識の曖昧さによって、プラスの方向へ変化させる事は出来なかった事を証明した。いわば光明は見えず、孤独と敗北の主人公であり、夢の不利益が有利に展開することはないのである。

『見えない人間』の黒人の主人公を、光明を見出す好意的人物、

積極的人物として描くことで、この作品は黒人文学における黒人の責任と尊厳を声高に表わす類型的作品であると言える。『ジョバンニの部屋』は白人の主人公デイビッドの孤独と敗北を描き、ホモセクシャルという特異な立場ではあるが、伝統的な白人アメリカ人の対極に位置すると考えられるジョバンニとの生活に真実があるという描写によって、作者と同じ黒人の文化を重視しているのである。白人の典型を重視するよりもその対極に位置するものを重視しているのである。つまり主人公の失敗と敗北という類型外によって、黒人の尊厳を描いているのである。

意思の力と光明による黒人主人公の勝利という類型による黒人表象の尊厳を描いている『見えない人間』、そして自己欺瞞と意思の曖昧さによる白人主人公の孤独という敗北を描き、間接的に黒人表象の尊厳を示した『ジョバンニの部屋』。伝統的な白人アメリカ人の対極に位置する存在のホモセクシャルであるジョバンニを好意的に描くという類型外の方法によって、黒人表象の重視を行っている『ジョバンニの部屋』なのである。類型と類型外の違いはあるが、両作品の目指す黒人と黒人文化の尊厳を高めるという人種問題のテーマは同じであると言えるであろう。この事を主人公たちの夢という無意識と意思という自己認識の違いによって、両作品は示しているのである。これが本稿の問いに対する答えである。

テニスプレイヤーの大坂なおみのアニメキャラクターを黒人としてではなく、白人として表現した事が最近のメディアで問題になるなど、黒人問題、人種問題は今なおもって敏感な問題である。人種問題から派生した女性問題、障がい者問題⁸、同和問題など人権全体に関わる問題は、これからも世間の注目を集め、そして我々も真剣に考えていかなければならない問題であると痛切に感じているところである。ここで示した『見えない人間』と『ジョバンニの部屋』という1950年代の2つの黒人文学は、2020年を迎える現代でも、なお問いを投げかける現在進行形の作品ではないだろうか。

註

- 1 . 以下、『見えない人間』からの引用は Ralph Ellison, *Invisible Man*, Vintage Books, 1995 年の版による。
- 2 . 以下、『ジヨバンニの部屋』からの引用は、James Baldwin, *Giovanni's Room*, 1990 年の版による。
- 3 . 光に対しての言及でこの他にもプロローグにおいて、主人公が 1369 個もの電灯を地下に設置している様子が描かれている(7)。これに加えてさらに多くの電灯を主人公は設置しようとしており、光への執着が明らかである。
- 4 . 認識の狭さは、ボクシング試合に参加する他の黒人に対しての差別的な考え、「僕は彼らに対して独りよがりな優越感を持っており、一緒に召使い用のエレベーターに乗せられた事が気に入らなかつた」(“ I felt superior to them in my way, and I didn't like the manner in which we were all crowded together into the servant's elevator ”)(18)等にも明らかであろう。自分も実際は同じ立場にいるのである。
- 5 . 彼の意思の強さは時に暴力の表象を含む事がある。プロローグ中に一人の男をトラブルから、死の一步手前まで殴る様子や、大学を追われてペンキ工場に就職した際に、担当上司だった男を殴り倒す様子などは、彼の自己主張の強さの証拠である。ボグズ・ニコラス(Boggs Nicholas)はエリソンの“ *The little Man at Chehaw Station: The American Artist and His Audience* ”を紹介しながら、エリソンの黒人登場人物たちの様子を「人種と階級と同じように、男性らしさの規範の分裂の可能性」(“ a potential disruption of the norms of masculinity as much as race and class ”)(261)と呼んでいる。暴力と男性らしさを結びつけるのは、ある意味危険であるが肉体的特徴と考えるならば、それほど見当違いではないだろう。
- 6 . ヘラの結婚観である食事を作ったり、世話をしたりして「あな

たの従順にしてこの上もない主人思いのしもべ」(“ your obedient and most loving servant ”)(120)という発想も「男は外で働き、女は家を守る」という伝統的固定観念を連想させる。

- 7 . 『見えない人間』におけるペンキ工場の一場で、白いペンキに黒の液体が混ざって本当の白さになる、という様子も白人と黒人の関係性にとらえる事が可能である。つまり、白人の力に抑圧されている黒人を表わす。
- 8 . ここでは「害悪」ではないという意味で「障害者」という言葉を使ったが、環境が「障害」になると考えるならば、通常どおり「障害者」の言葉の使用も可能である。公の機関でもどちらかに統一して使用する事、これを使う意味への説明責任を果たす事が求められている。

引用 · 参考文献

- Abel, Elizabeth. " Sara Blair, Harlem Crossroads: Black Writers and the Photograph in the Twentieth Century. " *Modern Philology*, Vol. 109, No. 2 (November 2011). <https://www.jstor.org/stable/10.1086/661661>. Accessed: 5 Dec 2018.
- Abur-Rahman, Aliyyah I. . " Simply a Menaced Boy": Analogizing Color, Undoing Dominance in James Baldwin's "*Giovanni's Room*." *African American Review*, Vol. 41, No. 3 (Fall, 2007). <https://www.jstor.org/stable/40027408>. Accessed: 18 Dec 2018.
- Armengol, Josep M. . " In the Dark Room: Homosexuality and/as Blackness in James Baldwin's *Giovanni's Room*." *Signs* Vol.37, No.3 (Spring2012). <https://www.jstor.org/stable/10.1086/662699>. Accessed: 18 Dec 2018.
- Baldwin, James. *Giovanni's Room*. Penguin Books, 1990.
- Benjamin, Shanna Greene. " There's Something about Mary: Female Wisdom and the Folk Presence in Ralph Ellison's *Invisible Man*." *Meridians*, Vol. 12, No. 1 (2014). <https://www.jstor.org/stable/10.2979/meridians.12.1.121>. Accessed: 5 Dec 2018.
- Boggs, Nicholas. " A GRAMMAR OF LITTLE MANHOOD: Ralph Ellison and the Queer Little Man at Chehaw Station. " *Callaloo*, Vol. 35, No. 1 (Winter, 2012). <https://www.jstor.org/stable/41412507>. Accessed: 5 Dec 2018.
- Bromell, Nick. " Democratic Indignation: Black American Thought and the Politics of Dignity. " *Political Theory*, Vol. 41, No.2 (April2013). <https://www.jstor.org/stable/23484422>.

Accessed: 5 Dec 2018.

Clark, William Bedford. " "The Black Dispatch": A Window on Ralph Ellison's First World. " *The Mississippi Quarterly*, Vol. 62, No. 1 (Winter 2009). <https://www.jstor.org/stable/26476680>. Accessed: 5 Dec 2018.

Ellison, Ralph. *Invisible Man*. Vintage Books, 1995.

Grandt, Jürgen E. . " INTO A DARKER PAST: JAMES BALDWIN'S " *GIOVANNI'S ROOM*" AND THE ANXIETY OF AUTHENTICITY. " *CLA Journal*, Vol. 54, No. 3 (MARCH 2011). <https://www.jstor.org/stable/44325797>. Accessed: 18 Dec 2018.

Hermance, Ed. " *Giovanni's Room* in the LGBT* Movement. " *QED: A Journal in GLBTQ World making*, Vol. 1, No. 2, GLBTQ Pasts, Worldmaking Presence (Summer 2014). <https://www.jstor.org/stable/10.14321/qed.1.2.0091>. Accessed: 18 Dec 2018.

Johnson-Roullier, Cyraina. " (An)Other Modernism: James Baldwin, " *Giovanni's Room*", and the Rhetoric of Flight. " *Modern Fiction Studies*, Vol. 45, No. 4 (Winter 1999). <https://www.jstor.org/stable/26285421>. Accessed: 18 Dec 2018.

Maier, Brennan. " THE ROAD TO DON CORNELIUS IS PAVED WITH GOOD INTENTIONS: The Crisis of Negro Nationalism in Ralph Ellison's Jazz Criticism. " *Callaloo*, Vol. 35, No. 1 (Winter, 2012). <https://www.jstor.org/stable/41412508>. Accessed; 5 Dec 2018.

Millichap, Joseph. " Fiction, Photography, and the Cultural Construction of Racial Identity in Ralph Ellison's " *Invisible Man*". " *South Atlantic Review*, Vol. 76, No. 4 (Fall 2011) . <https://www.jstor.org/stable/43738922>. Accessed: 5 Dec

2018.

Puskar, Jason. "Risking Ralph Ellison." *Daedalus*, Vol. 138, No. 2, Emerging Voices (Spring, 2009). <https://www.jstor.org/stable/40543938>. Accessed: 5 Dec 2018.

Welch, Dennis. "Ralph Ellison's *Invisible Man*: Secularizing the Fortunate Fall and Apocalypse." *African American Review*, Vol. 46, No. 2/3 (Summer/Fall 2013), <https://www.jstor.org/stable/23784064>. Accessed: 5 Dec 2018.